



祐介の目

No.139

大田祐介 (福山市議会議員)

図書館整備の是非

児童文学評論家の赤木かの子氏監修による市内小中学校の図書館整備が進んでいる。暗く狭かった図書館の古い蔵書を一掃し、自然科学、社会科学系の図書や歴史漫画等、子供たちが手に取りやすい本を充実させた。明るく居心地の良い図書館に生まれ変わり、児童・生徒の利用も増えているそうだ。令和5年度で市内全ての学校の整備が終了する予定だが、ここに来て雲行きが怪しくなってきた。

県の平川教育長と赤木氏の交友関係が指摘され、お友達人事による業務委託ではないか? という報道が相次いだ。何万冊という蔵書を廃棄したとか、どこの学校も金太郎飴のような図書館になり、同じぬいぐるみが置いてあると言った具合だ。しかし、図書館の蔵書の新陳代謝は不可欠であり、今の子供が好む本を揃えることに赤木氏は長けている。改装の成果は赤木氏が

大錠を振るった結果と評価されるべきだろう。しいて言えば、廃棄図書の中で思い入れのある本は子供たちに自由に持ち帰らせたり、市民に無償譲渡したり、中古書店に売却すれば良かったと感じる。

では何故赤木氏が批判されるのか? 自身の著書が新規購入リストに入っていたり、本の背表紙に貼るイラストによる分類シールは赤木氏オリジナルであり、自身が運営する社会福祉法人から大量に購入されていたり、我田引水と指摘されても仕方が無い面がある。特に分類については、イラストによる分類でわかりやすい反面、スタンダードな数字によるNDC分類と一線を画する。赤木式分類を今後も継続するなら新規図書が入る度に永続的に赤木シールを購入しなければならぬ。

いずれにしても子供の読書量が激減している中で図書館の利用が増えるという事は良いことだ。図書館の書架の上の方を見ると宇宙や星に関する本が、下の方を見れば地面に生える植物に関する本が配置するなど、随所に工夫が凝らしてある。子供たちには人生の方向を決めるような本に出会って欲しい。